

# 堤中納言「蟲めづる姫君」考

——平安朝成立説の再検討——

土 岐 武 治

堤中納言物語の一篇である「蟲めづる姫君」の物語梗概を記載すれば、

蝶を可愛がる姫君の隣に、按察使の大納言のお邸があつた。このお邸の姫君は、珍しい色々な虫ばかりを取り集めて、年頃になつても化粧はせず、蟲類の中でも、蟲毛が特に奥ゆかしいと云ふので、ひとり喜んでゐたが、それがとう／＼世間の評判になつてしまつた。その噂を耳にした、ある上達部の婿君である右馬の助は、いたづら心から帯の端を蛇の形に似せて、それを動くように仕掛けて、鱗模様の懸袋に入れ、その上、歌一首を添へて姫君のところへ贈つたところ、蟲を愛づる姫君は、さすがに怖しいのをじつところへ、ひどく無風流な厚紙へぎこちない片仮名で返歌をする。

物好きな右馬の助は、こいつは面白いと思ひ込んで、その後、女

堤中納言「蟲めづる姫君」考

の姿に身をやつして、立部のかげに忍んで覗いたが、うぶらしいところもなく、悟りすました姫君の振舞ひに、呆れ果て、「かはむしにまぎるゝまゆのけのすゑにあたるばかりの人はなきかな」と笑ひながら帰つてしまふ。

といふ筋書きになつてゐる。  
本篇は、堤中納言物語十篇中でも、甚だ特色のある作品で、源氏物語の英訳者 Waley は *The Lady Who Loved Insect* と題し、一九二六年に、ロンドンで訳本を出してゐる程である。この「蟲めづる姫君」の作者は、該篇の冒頭に、

蝶めづるひめぎみの住み給ふかたはらに、按察使の大納言の御むすめ心にくくなべてならぬさまに、親たちかしづき給ふことかぎりなし。この姫君のゝ給ふこと人々の花や蝶やと愛づることそはかなくあやしけれ。人はまことあり、本地にたづねたるこそ心ばいをかしけれ、とてよろづの蟲のおそろしげなるを取り集めて、これながらむさまをみむとて云々



と書き出す如く、美しい蝶を愛する姫君と、隣に住む気味の悪い蟲を好む、この姫君と併叙して、異常な主人公（蟲めづる姫君）の性格を大胆に予告して、読者の関心を喚起するのである。作者は、主人公姫君の口を借りて、この物語の心核を上記の例文通り、「人はまことあり、本地たづねたるこそ心ばへをかしけれ」と述べて、世界的な人間の理想を明瞭に言ひ切らせるところに、作者を支えてゐる世界観、即ち

華胄圈の階級（按察使大納言の御むすめ云々）

刹那的な感情生活（人々の花や蝶やと愛づること云々）

自家の榮譽（おやたち「いとあやしく、さまことにおはすること。」

とおぼしけれど云々）

などの王朝の貴族意識、朝露の悩みから脱却した、つまり浄土の人間の確立をめざしてゐるとも言へる。一見片意地で、異常心理の持主と世間から、とかく風評される姫君は、

(1) 毛鳥蟲の心ふかきさましたるこそ心にくけれとてあけければ

耳はさみをして、手のうらにそへふせてまほり給ふ。

(2) すべてつくらふところあるは、わるしとて、眉さらにぬき給としろはぐるめさらにするさし、きたなしとて、つけ給はず。

いはず、らかにゑみつゝ、この蟲どもを朝夕にあひし給ふ。

と云ふ。これは世俗的な因襲への反逆の態度といふよりも、人間拘束の通念性の無価値を排して、理想の本地に徹しようとする結果、髪も耳ばさみのまゝに、眉毛も抜かず、おはぐるもつけぬ態度で、隣家の花蝶めづる姫君へは勿論のこと、自分の行動を嘆く両親や召

使ひの童達、また女房や悪戯をしかける右馬の助などに対しても、些かの遠慮会釈もなく、姫君は、信念とする自己の性癖趣味を押し通してしまふのである。だがこのやうな構想を意図する作者は、単に姫君を一奇人として描くと観るよりも、何処までも姫君の性格・行為を通じて、純粹な中世的批判を充分に寓してゐるのであつて、また姫君に関する記述の中で、

(1)人はまことあり本地たづねたるこそ心ばへをかしけれ。

(2)すべてつくらふところあるはわるし。

(3)よろづの事どもをたづねて、すゑを見ればこそことはゆえあれ。

(4)人はゆめまほろしのやうなるよにたれかともまりてあしき事をもみよきをもみ思ふべき。

と、この主人公を性格つけてゐる。実は右の用例文は、作者の尊崇の經典であつて、作者は、「願望の成否は宿世の契りである」といふ仏教的色彩（十二因縁法）を有する人生批評の数々を整理して、それを丹念に積み重ねてゆき、またさうすることによつて、作品全体の志向的印象を明確化し、このやうな力点の配置によつて、物語を類型化させずに、独創的に展開させてゆくのであつて、その巧みな手法は、一切作者の主観的な感情を挿入せず、冷徹な客観的、科学的な創作態度で、姫君の行動・性格を本物語へ克明に特色づけてゐる。姫君は人々の嘲笑を浴びながらも、

人々／＼おちわびて（毛鳥蟲を）にくれば、その御かたは、いとあやしくなんのゝしりける。かくおづる人をば、「けしからず、凡俗なり。」とて、いとまゆるろにてなんにらみ給ひけるに、いと



ゝ心ちなんまどひける。

などの如く抗弁し、物の表面だけに眩惑されて、その本地を認識しようとなし世間の凡俗をば、前例の如く、却つて諷刺をも混えて対決するのである。殊に姫君は、右馬の助の悪戯による蛇梗概に向つても、

きみはいとのどかに、「なもあみだ仏、なもあみぞ仏。」とて、「さうぜんのおやならん、なざわざそ。」とうちわなゝかし、かほゝかやうに、「なまめかしきうちしも、けちえんにおもはんぞあやしき心なるや。」

と眩く信心的態度に深化が存し、そこに草木国土悉皆成仏の中世思想を見逃すことは出来ないと共に、毛鳥蟲に仏性を賦与する作者の一貫する真相をも、改めて確認し得ると考へる。従来この作品について、「主人公の異常性・異嗜性のみを明瞭にする」と評価する旧説には、どうしても前述の観点から賛意を表し難く感ずるのである。本物語に於ける滑稽・異常の趣向には、事象の表面の眩惑を第三者的に繰る作者の冷理周到な作為があり、この意図する素材の内部に前記の主想は底流して、読者に新鮮な問題を投げかける。この創作の技巧は、勿論作家の鋭い個性でもあらうが、作品成立の歴史的環境より観察すれば、王朝成立の笑へを有する作品とは、その内容の事情を異にすると思ふ。例へば、堤中納言物語十篇中で、平安朝成立と推測される「花桜折る少将」の物語後半に見える、以外な滑稽を招く事件の構想も、全く源氏物語、末摘花の巻に、源氏君が故常陸親王の姫君末摘花に忍んだ場面と同じく、優美の雰囲気に以外な

喜劇が登場し、そこに読者の爆笑を待期する趣向であり、また後段にも叙述する如く、平安朝成立の「はいずみ」物語後半の所謂「はいずみ譚」のユーモアにしても、これは平貞文の「泣きまね譚」の影響による換骨奪胎であつて、この物語構想も伊勢物語二十二段并簡の思はぬ滑稽を招く説話に符合するやうである（説林、昭和二五、七・八月号取敢拙稿「はいずみ篇の典拠研究」参照）。以上の挙示する「花桜折る少将」「はいずみ」などの短篇物語には、いづれも物語前半の環境・事件・人物の情緒的雰囲気に、異常な場面、奇抜な事件を与へて、滑稽に物語を展開させる趣向の落ちのみが主体となつてゐるのに反し、本物語のそれは、より現世的であり、より人間的であり、見方によつては啓蒙性を具有してゐるとも云へる。このやうな趣向の内容・作法は、時代と共に漸次成長独立をして、それが中世の庶民的文芸成立の機運に温醸されて行くものではなからうか。ただ鎌倉初期成立と推定する本物語に於いては、深遠な中世的人間を何処までも内容の基調とする構想のもとに、作者は姫君を異端的な諸諷的な性格に特色づけてゐるのであるが、作者はまた一方、口つきもあいきやうづきてきよげなれども……けさうしたらば、きよげにはありぬべし。

まことにうとましかるべきさまなれど、いときよげにけだかう……」。

などと、姫君の本来の美貌を賞讃し置いて、好色な右馬の助との事件を後段に登場させる伏線を此処に用意してゐる。美しい姫君を覗いて、「……などかいとむくつけき心なるらん。かばかりなるさま



を。」と、彼女の容貌や心情に、多くの興味を感じながらも、異常な性格を惜しむといふ個所や、或は姫君の父大納言が、「いとあさましく、むくつけき事をも聞くわざかな。さる物のあるを、みる／＼みな立ちぬらむ事ぞあやしきや 右馬の助の様を女房の一人が、姫君の父に申上げたので、父君は「ほんとうに驚き呆された気味の悪いことを聞くものだ。そのやうな物のあるのを見ながら、皆逃げてしまふことはけしからんこと。」とて、ことのほかの不興で、いきなり刀を提げて、姫君の部屋に駆出し、右馬の助からの屈物を見ると、それは蛇によく似せて仕掛けた帯であるといふ辺の描写―瞬間的心理の屈折などの趣向によつて洗練され、誠に本篇は独自の創新の工夫を發揮してゐる。

後段に更に詳述するが、十訓抄などに伝へる宗輔蜂飼ひの内容は、蜂の仏性を具へてゐるといふ、草木国土悉皆成仏の仏教的倫理が、中心になつてゐるやうに考へられる。中世に入ると、人間以外の動物を取扱ふ作品が多く現れ、殊に禽虫を看て速かに仏身を成就すべき信心的教理の説話が、本論の場合特に注目されるのであつて、例へば、稍、後年の随筆「虫の記」此記ハ私宅山里ニテ壁ニ有虫ヲ見テ閑日ノアマリ且者信心ヲ進ムムガ為書之者の文章中にも、

- 1 かくのごとくのふしぎをみ侍るにつけて、我等が本身なにも、ぞや、地水火風かりに集合して有侍の身となれると申義分はたれもさこそとおぼゆ。
- 2 かひこをわりぬれば、親とひとしきこと成て、虚空にかけるをたとへにひき給ふ。
- 3 もとより鱗蟻蚊蛇にいたるまで、仏性をそなへずといふことな

し。

と見え、これらの諸事項は、本物語「蟲めづる姫君」の、

- 1 よろづの事もたづねて、すゑをみればこそことはゆゑあれ。いとをさなきことなり、かはむしのでふとはなるなり。
- 2 きぬとて人のきるも、かひこのままだねつかぬにしいだし、てふになりぬれば、いともぞでにて、あだになりぬるをや。
- 3 「さうぜんのおやならん、なさはぎそ」……「けちえんにおも

はんぞあやしき心なるや。」

と伝へる個所、また比較的仏語・漢語を多く本文中に用ひてゐる点なども併せ考へて、両作品は誠に近似してゐるのであつて、換言すれば、内容も文体も共通して、中世的・仏教的であると云へるのではなからうか。しかも本物語冒頭の花蝶を愛づる「花草紙一九七段々日もわがこころをば 隣家の姫君は、恰も優美艶麗な王朝風なれども、主人公姫君だけは「よろづの蟲のおそろしげなるを取り集めて、これがならむさまをみむ」として只管本地追究の生活に没頭するのであつて、此処にも作者の企図する中世的な思想が窺はれる。

物語の祖と云はれる竹取物語の典拠は、輿誓指帰・睡覚記・三教指帰・月上女経などに伝へる滑稽談・失敗談などの説話に拠ると説かれてゐるが、これと同じく、蟲めづる姫君も亦、宗輔蜂飼ひの伝来説話が典拠となり、それが前記論述の歴史的・個性的構想の下に、しかも單式的説話から複式的な物語の発展に立つて、この短篇物語が創作されたのではなからうか。



以上の特質を有する「蟲めづる姫君」篇の典拠については、既に江戸時代の清水浜臣（一七七六—一八二四）自筆本無窮会図の書入にも京極大臣宗輔の蜂を飼育する説話に基因するものと解かれてゐる。宗輔は公卿補任によると、

二条（応保二年）藤宗輔八十六才

前太政大臣正月廿七日出家同卅日入滅。号京極太政大臣。世云蜂飼大臣

と伝へるが、この宗輔の蜂を育てる話は、今鏡「から人のあそび」、古事談「王道後宮」及び十訓抄「可<sub>レ</sub>定心操振舞<sub>二</sub>事」の中にそれ〴〵見える。これら三書に伝へる宗輔の「蜂飼ひ談」の内容は、十訓抄が最も委細に記載してゐるので、いま十訓抄に見える該説話の梗概を左に挙示すれば次の通りである。

古来蜂は、形が小さいけれども、人の恩を忘れず、誠に仁智の心が厚い蜂である。京極大臣宗輔は、多くの蜂を飼つて、何丸彼丸と名前をつけて呼んでゐるので、人々はそのさまを誠に異様に思つた。いつも蜂を可愛がる宗輔の心を知つてか、宗輔の云ふまゝに良く仕へるので、人々はいつのまにか、宗輔を蜂飼ひの大臣と名づけ、その徳を賞讃する。

との筋書きや用語の字句は、「蟲めづる姫君」の作品と頗る近似する箇所が多いやうに思はれるので、先づ両作品の用語上の近似する諸点を取上げて左に比較対照して見る。

### 蟲めづる姫君

(一) このむしどもをとらせ、名をとひき、いまあたりしきには、名をつけて興じ給ふ……：けらを、ひきまろ、いなかだち、いなこまろ、あまびこなどつけて

(二) そのたてじとみのつらに、いとほかしげなる人侍るなるを、おくにて御覽せよといへば、「けらを、かしこにいのみてこ」とのたまへば

(三) 人はまことありほんちたづねたるこそ心ばへをかしけれど、よろづのむしのおそろしげなるをとりあつめて、これがならんさまをみると

(四) むくつけよなるかはむしをけうずるなると、世の人のきかんなもいとあやし。

との如きは、両作品とも略々符合するばかりでなく、蟲めづる姫君篇で姫君が、

この木にすべていくらもありくは、いとをかしき物かな。これを

### 十訓抄「可<sub>レ</sub>定心操振舞<sub>二</sub>事」

(一) 蜂をいくらともなく、かひ給て、何丸彼丸と名をつけてよび給ひければ

(二) 召しにしたがひて、格勤の者などを勘当し給ひけるには、「何丸、某さしてこ」との給ひければ

(三) すべて蜂は、形小さきものなれども、仁智の心ありといへり。さればにや京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくらともなく、飼ひ給ひて、

(四) 此の殿の蜂を飼ひ給ふを、世の人の無益の事といひける



御覽せよとて、すだれをひきあげて、いとおもしろきかはむしこそ候へといへば、さかしき声にて、いとけふあることかな、こちもてこ

と男童に云つて、木に一ぱい這ひ歩いてゐる蟲を眺めてゐる様は、十訓抄に

相国御前に枇杷のありけるを一房とりて、琴爪にて皮をむきて、さしあげられたりければ、蜂のある限りとり付きて、ちらざりけるを、つけながら供人をめしてやをらたびてけり。

と伝へ、宗輔は蜂のある限りを、枇杷の一房にとりつかせて喜ぶ文面や趣向は、前例の蟲めづる姫君の場面と類似するのである。

また、「蟲めづる姫君」の主人公である姫君は、かわむしの心ふかきさましたるこそ心にくれ

と述懐する個所も、十訓抄に於ける主人公宗輔が、蜂は形小さき物なれども仁智の心あり

と云つて、蜂の飼育に専念する個所と、同種の筆法でもあるし、しかも上記の両作品の本文は、それ／＼該作品の主旨を表明することになる。

その他十訓抄では、

蜂の巢の俄におちて、御前に多く飛びちりたれば、人々さゝれじとて、にげさわぎけるに、相国御前に枇杷のありけるを一房とりて、琴爪にて皮をむきて、さしあげられたりければ云々

の場面は、「蟲めづる姫君」の  
くちなはくびをもたげたり。人々心をまどはしてのゝしるに、き

みはいとのどやかにて、なもあみだ仏／＼とて、さうぜんのおやならん、なさわぎそ……」

との内容にも似通ふものとも考へられる。

ところが本篇との近似関係は、単に十訓抄のみに限らず、今鏡・古事談にも指摘し得られる。例へば「蟲めづる姫君」と「今鏡」のそれを比較すれば、

#### 蟲めづる姫君

今鏡「から人のあそび」

(一)てふめづるひめぎみのすみ給ふかたはらに、あせちの大納言の御むすめ心にくゝなべてならぬさまに

(一)按察(宗)の御子にて、備中守実綱といひしはかせ腹のに、右大臣宗忠のおとど、また堀川の左のおとど(房)宗輔など近くまでおしき。

(二)よろづのむしのおそろしげなるを、とりあつめ、これがならんさまをみるとて

(二)蜂といひて人さす蟲をなん好みかけ給ひける。

(三)このむしどもをとらせ、名をとひきゝ、いまあたらしきには、名をつけて興じ給ふ……

(三)あしだか、つのみじか、はねまだらなどいふ名つけて呼ばれければ、

ち、いなこまろ、あまびこなんどつけて、

となる。殊に「蟲めづる姫君」の冒頭には、次の本文が見え、てふめづるひめぎみのすみ給ふかたはらに、あせちの大納言の御



むすめ、心にくゝなべてならぬさまに、おやたちかしづき給ふことかぎりなし。

とのやうに、主人公である姫君の父は、大納言で按察使を兼ねてゐる方である。ところが今鏡にも

按察(宗)の御子にて、備中守実綱といひしはかせのむすめの腹に、右大臣宗忠のおとど、また堀河の左のおとど(房)の御むす

めのはらに、太政のおとど宗輔など近くまでおはしき。

と伝へる。宗俊の姓は藤原氏で、公卿補任によると、「権大納言正二位兼按察使 承徳元年五月五日薨五十二才」と見え、蜂飼ひの宗輔の父、即ち宗俊の官職名と、蟲めづる姫君の父のそれとは、共に按察使大納言で、両者とも符合することになる。

また古事談(三三一—三三三)に於ける宗輔蜂飼ひ談は、十訓抄、今鏡のそれに比較すれば、頗る簡略に記されてゐるが、それにしても蟲めづる姫君の作品との近似点を取上げれば、

蟲めづる姫君

(一)人々をぢわびてにぐれば、

その御方は、いとあやしくな

んのしりける

古事談第一

(一)御前多飛散ケレバ、人々モサ

、レジトテ、ニゲサハギケル

ニ、相国、御前ニ枇杷ノ有ケ

ルヲ一総トリテ、コトヅメニ

テカハラムキテ、サシアゲラ

レタリケレバ、蜂アルカギリツ

キテ、チラザリケレバ

との一個所の類似点があげられる。

堤中納言「蟲めづる姫君」考

以上の十訓抄、今鏡、古事談に伝へる宗輔蜂飼ひの説話の記事には、本によつて多少の多寡はあつても、内容の趣向はいづれも同型であり、また蟲めづる姫君の本文と、此等三書との近似点は、上載の示す如く、十訓抄、今鏡、古事談中にそれ／＼指摘されるもので、一概に宗輔の事実説話を委細に記す十訓抄のみに、直接の典拠關係を保有するものとも認め難い。

按ずるに、これは宗輔蜂飼ひの説話として、早くより古事談・十訓抄成立の鎌倉初期頃世に伝承流布されてゐるものを、本篇の作者は、蟲を好む宗輔を、毛蟲を好む女性(姫君)に交替させたものと推測する。丁度、堤中納言物語の「はいずみ」篇の後半に見える新しい女(本妻に対して)が、突然相手の男の訪門に慌て、化粧にかゝり、遂に灰墨を白粉と間違へて顔に塗るといふ、女の意外な場面は、平貞文が、女の前で硯の墨水を誤つて顔に塗る「泣きまね譚」を直接の著述材料としたスタイル、即ち男性(平仲)の滑稽を女性(新しい女)のそれに換骨奪胎させたもので、蟲めづる姫君の典拠關係も、上述の「はいずみ」の著述材料のそれと、全く同性格だと言ひ得る。ただ、蟲めづる姫君中に、右馬の助が立部のもとに忍んで、姫君を覗く場面に、次の文章がある。

ちぎりあらばよきこらくにゆきあはんまつはれにくしむしのすがたは

ふくちのそのとなむある。むまの助み給ひて、いとめづらかに、さまことなるふみかなとおもひて、いかでみてしがなと思ひて、中将といひあはせて、あやしき女どものすがたをつくりて、あせ



ちの大納言のいで給へるほどにおはして、ひめぎみのすみ給ふき  
たおもてのたてじとみのもとにてみ給へば……。

との趣向は、源氏物語空蟬巻の

さりげなき姿にて門などささぬ前にと急ぎおはず、人見ぬ方に引  
き入れて、おろしたてまつる。わらはなれば宿直人なども、殊に  
見入れ追従せず、心やすし、東の妻戸に立てまつりて、我は南の  
隅の間より、格子叩きのムしりて入りぬ。御達あらはなりといふ  
なり。「などかう疊きに、この格子は下されたる」と問へば、「昼  
より西の御方のわたらせ給ひて、碁打たせ給ふ」といふ。さてむ  
かひいたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて、すだれのは  
さまに入り給ひぬ。

との光源氏が妻戸のかげから、軒端萩をかいま見る事件に酷似し、  
殊に蟲めづる姫君の容貌を「髪もさがりば清げにあれ」「口つきも  
愛敬づきて清げなれども……」と描く辺は、上例の源氏物語の本文  
と略々同一個所に

まみ口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさ  
やかにて、長くはあらねど、さがりば肩のほどいと清げに、すべ  
てねぢけたる所なく、をかしげなる人と見えたり。

と伝へるが、この「髪はいと房やかにて長くはあらねど、さがりば  
肩のほどいと清げに……」「口つきいと愛敬づき……」とある軒端  
萩の面影に、決して没交渉であるとは考へられまい。

三

「蟲めづる姫君」は平安朝の作品であらうとの推定説は、従来よ  
り常識的に踏襲されて今日に至るもので、それらの成立説には、確  
証に基づく資料によるものでなく、私意になる推定によるものであ  
る。ただ堤中納言物語評解題「蟲めづる姫君」一四十二頁参照のみに、

平安時代の作品たる点は、疑ふ事が出来ない。「侍る」などの用  
法は、適確に平安時代であることを示している。

との理由によつて、平安朝成立説を保持してをられる。右の評解の  
「侍る」とは、対称に用ゐる「侍り」の意と考へるが、この種の  
「侍り」は、右の評解の解説通り「蟲めづる姫君」の本文中にも、  
「とりわかつべきも侍らず、たゞこゝもとに御らむぜよ。」といへ  
ば……。

「そのたてじとみのつらに、いとほかしげなる人侍るなるを、  
おくにて御覽ぜよ。」といへば……：「たちはしりていきて」「まこと  
に侍るなり」と申せば……。

との第二人称的な用語の「侍り」は、本物語中に見えるのである。  
ところが第二人称の用法の「侍り」の用例は、単に平安朝成立の作  
品に限らず、鎌倉時代の作品中にも屢々使用される詞である。例へ  
ば、建久七年（一一九七）より建仁二年（一一〇三）までの成立と  
推定される無名抄中にも、

「いとうとましげなる有様を、をちに見などもし給はで、むげ  
に若き御程に、慈悲深くものし給ひけるも、かゝる仏の御あたり  
にものせさせ給ふ御故にや侍らむ」

「今朝とく出で侍りて、とかくまどひ侍りつるほどに、今までか



たいし侍りにける」として……。

と見え、建暦三年（一一二二）三月に成立すると伝へる方丈記中に  
も、

「今はかうにこそ侍る、めれ……みづから浅き所も侍らん」

と伝へ、建長四年（一一五二）成立の十訓抄序文に「建長四とせの  
おのづから暇あき心簡なる折節にあたりつゝ草の庵を東山の麓にし  
めて、蓮の台を西山の雲に望翁、念仏のひまに、これをする終はる  
こと、しかりとにも  
なむいへる。」にも

「ざりとも菅丞相の仰せられしこともきゝおきて侍るあり」（可  
誠三人上多言等事）

「これおとして侍るなり。たてまつれ。」とでもてきたりければ

（可存忠信廉直旨事）

「いづれの行ひか、かならず住生の業となり侍るべき。このこと  
凡夫のくらき心に、はからひがたくな侍る」と申す。（可存忠  
信廉直旨事）

とあり、また建長六年（一一五二）成立の古今著聞集序文「平時に  
も、

「あはれ風の吹きさぶらへば、動くに侍り」と申したりけるに満  
座笑ひけり。

と伝へ、これらの鎌倉時代成立の作品中にも第二人称的用法の「侍  
る」の用例があるので、「蟲めづる姫君」の成立を、直ちにこの種  
の「侍り」のみをもつて、平安朝成立と確認することは、適当と考  
へられぬ。

### 堤中納言「蟲めづる姫君」考

元来、蟲めづる姫君の文章中には、「本地」「凡俗」「凡帳」「愛  
敬」「生前」「結縁」「極楽」「福地」「化粧」などの漢語が多く  
使用されてゐる点にも、堤中納言物語中の他作品に比較して本文の  
特徴を存してゐると云へる。本物語の冒頭に

人は実あり、本地たづねたるこそ心ばへをかしけれ

と見える本文中の「本地」は、平安朝の物語作品中には、殆ど見え  
難く、中世以後の作品になつて、この仏語が発見されるやうである。  
例へば

○本地、千手観音（平家物語）

○本地、一体にして、衆生を濟度し給ふ（平家物語）

○本地、阿弥陀如来にてまします（平家物語）

○直ちに本地の風光を尋ねて、出離の道に入りたまふべし（源平  
盛衰記）

○源空本地身、大勢至菩薩（古今著聞集）

などの「本地」は、その一例に過ぎなくて、中世は盛に「本地」と  
いふ仏語を用ゐた時代でもある。

清水泰先生は、雑誌「国語国文の研究」の昭和四年十一月号所収  
「堤中納言物語私考」で、

「蟲めづる姫君」の中に「この木にすべていくらも歩くは」の語  
があるが、「いくらも」と云ふ語を数多くの意に用ゐるのは、鎌倉  
時代の用法に思ふ。尤もこれは自分の寛見を以つての考へで或は  
誤りがあるかも知れないが。又「蟲めづる姫君」の中に螻蛄をい  
ぼしりといふ。岡田希雄君より聞くとところによると、「いぼしり」



と云ふ言葉は鎌倉時代に生じた言葉らしく思はれる……又「あだ」とか「なか／＼」の語も平安朝時代とは異つた用法であることを発見する。

との通り、数多くの鎌倉時代の語彙を述べられてゐる。右の岡田英雄氏云々の「いぼじり」とは、「いぼじり、かたつぶりなどをとりあつめて……。」との本文中に見えるもので、この当該本文の異同は諸本になく、すべて「いぼじり」となつてゐる。岡田英雄氏の「いぼじり」と云ふ言葉は鎌倉時代に生じた言葉らしく思はれる」と云はれる証左の内容はどのやうなものであるかは解らぬが、この「いぼじり」の訓について倭名抄十九「以利無之利」、名義抄「イヒホムシリ」「イホムシリ」、新撰字鏡六の十八「伊比保牟志利」と見え、鎌倉期の字類抄「イボウジリ」と伝へる。この呼名は、平安朝後期頃からあつたものであらうか、散木奇歌集、雑下にも

人々あまたぐして、観音寺のかたへまかりけるに、ひきかへのうしのことの外にちいさくやせて、えひかさりしかばいぼうじりとなつてわらふほどに、かたはしぎまにたふれぬべくよろほへば、うしろざまにあゆはせてたふすなど人々あるを聞て、

くびほそくいぼじりしてたちなほれ

又云  
蛭蚊

との通り「いぼうじり」と見える。節用集には、「**蛭蚊**」に「イボジリ」「イモジリ」などの振仮名が見え、圈点の異同も存するが、中世には「父母」の訓は「**ボボ**」「**ブモ**」などと混用してあるので、当時は「イボジリ」「イモジリ」と両用に発音されたものであらう。少くとも**蛭蚊**の呼名は平安朝の「イヒホムシリ」「イホムシリ」は、

中世には「イボウジリ」「イボシリ」などと變つて来てゐることになる。群書類従本の新猿蓑記にも「**蛭蚊舞之頭筋**」との傍註を伝へる。

また「蟲めづる姫君」に

みるきみたちも、あさましうさへ、なんあるわたりに、こよなくも  
あるかな、と思ひて云々

と見え、右の「さへなん」の本文は、副助詞「さへ」と、係助詞「なむ」の二助詞の複合語より成るものであるが、拙著「堤中納言、旧説では、この「さへなん」に漢語の「災難」を当ててゐる。もし仮りに「災難」の本文が原文であるとすれば、「災難」の用例は、平安朝作品中には見え難いのである。更に本編の

かいこのまだはねつかぬにしいだし、てふになりぬれば、いとも  
そでにて云々

の「袖にて」なども中世以降の語であらう、その用例は、後年のものながら狂言の「大江山」の間の一節に

其方の子供も袖にして、悪うそだつによつて、ことの外疲れて……とある圈点の語と同意に考へる。

従つて、以上の内部的・外部的な考察から推定して、本物語は前述の如く宗輔蜂飼ひの説話が興味深く、十訓抄、古事談などに取上げられた前後の鎌倉初期頃成立せるものであらう。

昭和二十七年十一月九日稿

昭和三十三年三月十八日補